

武士道における武辺、慈悲、情けについて

『三河物語』『葉隠』『甲陽軍鑑』を手がかりに

岡田大助*

はじめに

「武士道」とは、かつて我が国に存在していた特殊な階級としての武士達が、生きる拠り所としてきた思想のことである。すでに繰り返し指摘されているように、武士は我々にとっては歴史的背景を大きく異にする他者であり、その思想に安易に同化、内在することを許さない存在である一方^①、おかれた状況の異なることを看過して現代の常識からその暴力性を安易に断罪することはあまり建設的でないことをはじめに確認しておく。

武士の特徴は以下のように規定されている。すなわち、①武士は戦闘を生業とし勝つことを追求する存在である。②武士は妻子家族を含めた独特の団体を形成して生活する。③武士は所領の維持拡大を求める存在である^②。つまり、武士は、独特の団体を背負い、戦闘に勝って所領の維持拡大を追求した存在であるということである。とりわけ特徴的なのは、戦闘に勝つことを追求した存在であるということである。

ところで、勝つことによる所領の維持拡大の追求は、利益の追求にもなる。しかし、武士が勝ちを求めるのは、歴史学の世界で往々にして指摘されるように利益追求それ自体を目的としていた^③、のではない。武士は己の実力を証明するためにこそ勝つことを求めたとされ

る^④。利益もまた、自己の実力を証拠立てる手段に過ぎない。だから、武士はときに利益をあつさりとして捨ててみせる。例えば、武士道の世界で後世理想の武士と称賛されてきた斎藤別当実盛^{べつどうさねもり}は、源平の争いの中で、あえて負け戦に参じ、絶望的な敗戦の最中に踏み止まって討死し、自らの武勇をその人生の最後に証明してみせたという^⑤。実盛の生き方は、利益追求を目的とするという武士道理解への明白な反証である。

このように、武士は武力で戦闘に勝ち己の実力を証明することを重視したが、他方、『三河物語』『葉隠』『甲陽軍鑑』^{こうやうぐんかん}という武士道の代表的なテキストのすべてが、一見するとそれと矛盾するような慈悲や情けを重視している。戦闘で勝つことを重視する武士道において、慈悲や情けはいかなる意味を持ち、どのように位置づくのであるのか。本稿では、従来ともすればばらばらに解釈されてきた^⑥勝つことと、慈悲や情けの内実、そして一見矛盾するかに見えるそれら相互の関係について、上記の三つの代表的テキストのそれぞれの理解を比較しながら解釈することによって、武士道の思想を総合的に明らかにすることを目的とする。そして、その過程において、従来ともすれば渾然一体と理解されてきた、慈悲や情けのテキストによる特殊性についても明らかにしたい。

二〇一八年一月三十日受付

* 江戸川大学 基礎・教育センター 准教授 日本論理想史

以下、代表的な武士道書『三河物語』、『葉隠』、『甲陽軍鑑』のそれぞれについて、武士が武力で戦闘に勝つことと、慈悲や情けの理解、及び、それら相互の関係、そして、それらのテキストにおける特徴について詳しく見てゆくことにしよう。

一 『三河物語』

『三河物語』(一六二二年成立)は、松平・徳川家の譜代の家臣であり、家康、秀忠、家光に仕えた歴戦の武士・大久保彦左衛門忠教が子孫に残した書物で、上、中、下巻からなる。そこには、松平・徳川の歴代の主君と、主にその譜代の家臣達、とりわけ大久保家の人々が、戦国の世を勝ち抜き天下を統一する頃までの来歴が記されている。そこで忠教は、御家の維持と繁栄を可能にした三大要素として「徳川三引付^{ひきつけ}」⁽⁸⁾を挙げる。徳川三引付とは、松平・徳川家の主君が持つべきとされてきた三つの優れた能力のことである。

①武 辺 武事における優秀性。弓矢や鉄砲の巧みな技術といった身体的な能力から、難敵に立ち向かい危機に陥った家臣を救いに行く勇敢さ、敵を欺く軍略といった精神的な能力までを含む。

②御慈悲 家臣や領民、敵対者への慈しみ。領民のために道を作り橋を架ける、妻子ともども死罪になるはずの家臣の罪を許す(初代親氏)、一向一揆で一度は背いた家臣、光秀、秀頼などの敵対勢力を何回かは許す(家康)など。

③御情け 些細な行爲による家臣への情け。身内の衆に情けをかけた言葉を懇ろにかける、主君の前で膝を崩させる(初代親氏)、圧倒的に優勢な北条早雲の軍勢に立ち向かう前に家臣と同じ器で酒を回し飲みさせる(五代長親)、家臣に主君のお椀でお酒を回し飲みさせる(七代清康)など。

『三河物語』のなかで、徳川三引付についてはいくつかまとめて規定されている箇所があるが、上巻の主な規定(六代信忠)では、武辺は三引付のなかでも第一に挙げられており、御家を成り立たせる上で第一の条件とされる。武士は他の勢力と武力で存立をかけて対峙しており、武事が優秀で勝つことができなければ、敵対勢力に滅ぼされてしまふからである。あるいは、御家の武力が主君と家臣の力とを合わせたものと考えられると、家臣は武事において自分より優れた主君にでなければ惚れることはなく、主君は惚れさせなければ、戦で家臣の通常を越えた力を引き出すことができず、総合的な武力において劣ってしまう、という説明もできよう。しかし、御家の維持は、主君が武事に優れるのみではできない。加えて、御慈悲や御情けが必要であるとされる。六代信忠は、これらの資質を欠いていたため、家臣や民の多くに背かれ、引退せざるを得なくなったという(同前)。

主君からの御慈悲や御情けは、いわば「通常を越えた贈与」⁽⁹⁾である。それを受けた家臣は感激して涙を流し、通常を越えた働きで応えようとする。例えば、圧倒的に優勢な敵と、自らの命はもちろん妻子の命すら省みずに戦えるようになる。命と釣り合う利益は考えられないので、それはもはや、個々の利益追求では説明できない、等価交換を越えたはたらきである。『三河物語』には、松平・徳川の歴代の主君が、家臣に御慈悲や御情けをかけることで譜代の家臣の力を引き出し、圧倒的に優勢な敵と幾度となく戦って維持されてきたことが記されている(例えば、五代長親が北条早雲を退けた戦い(上巻)、家康が北条や秀吉の優勢な軍勢を退けた戦い(中巻)など)。

さらに、下巻の三引付についての規定では御家を成り立たせる必須の要素に、三引付に加えて良い譜代の家臣が加えられている。そして、三引付を備えた優れた主君と、妻子の命すら省みずにはたらく譜代の家臣との強固な主従関係が、松平・徳川武士団の強さを生み出し、御家を繁昌させてきたという。武術・武略に長け、ときに家臣を助けに

駆けつける勇敢さを持ち、さらに御慈悲や御情けを施してくれる主君の「通常を越えた贈与」に対して、譜代の家臣は涙を流して感動し、こちらも、戦などで通常を越えた働きで応える。他方、主君はそういった家臣を身に余るものと受け止める。こういった、主従相互の通常を越えた贈与の連鎖から形成される深い心情の交流が、戦をはじめとする様々な場面での相互の献身的な働きを引き出し、御家を繁昌させてきたというのである。

次に、敵対勢力に対する慈悲と因果応報について確認しておこう。

『三河物語』においては、松平・徳川の代々の主君の家臣や領民に対する慈悲のほかに、主君の敵対勢力への慈悲が取り上げられ、それがよい結果をもたらすとされる。とりわけ、家康が謀反人や命を狙ったものをごとく助けたことは際限もない、という。例えば、信長の子信雄のぶおが一度は家康に敵対したにもかかわらず許してのちに所領を安堵したり、敵対者であった石田三成が救いを求めてきた際に助けたり、豊臣秀頼が敵対しても四度までは許したりしたのは、家康の御慈悲の深さゆえであるという。さらに、信長が彼と敵対した伊賀の人々をどこにいても皆殺しにしようとしたのに対して、家康は、領国の三河、遠江に来たものは隠しおいて一人も成敗しなかった。そしてその結果、本能寺の変の後、伊賀路から本国へ帰ろうとする際、伊賀の人々が助けてくれて無事に帰国することができたとされる。家康の敵対勢力に対する慈悲深さが、のちに彼らを味方に引き付け、未来に良い結果をもたらしたというのである。

このようにみると、主君の家臣や民への御慈悲、家臣への御情け、そして敵対勢力への慈悲は、それぞれ勝つことと矛盾するものではなく、かえって御家を強くしていることが理解できる。すなわち、家臣への御慈悲や御情けは、主君と家臣との間に深い心情の交流を成立させ、家臣の通常を超えた働きを引き出し、戦をはじめ御家の力を強くする。あるいは、敵対勢力への慈悲はときにかつての敵を味方に引き

付けるなど良い結果をもたらす。したがって、御慈悲や御情けは、勝つことと矛盾するのではなく、むしろ、勝つための手段、すなわち、御家が戦に勝ち勢力を維持拡大してゆくための、そして、武士としての実力を証明してゆくための有効な手段として位置づけることができる。さらに、御慈悲や御情けが優れた主君の必要不可欠の要素とされたことを踏まえるならば、武辺と慈悲や情けとは、武辺を第一としつつも、どちらが欠けても前に進まない車の両輪のような関係にあるといえよう。また、家臣の側から見ると、忠教が未来の主君と子孫との間で成立することを願っているのが主君の御慈悲や御情けを受けることから生じる主従の深い心情の交流であるとするならば、戦で勝つて主君や自らの実力を証明することだけが目的ではなく、主君の御慈悲や御情けに出会うことが、それに劣らぬ目的であると理解できる。

二 『葉隠』

『葉隠』^①（一七一六年頃成立）は、佐賀藩二代藩主鍋島光茂みつしげに仕えた山本常朝じょうちゆうが、光茂の死後すぐに出家して人里離れた草庵に隠遁したのち、しばらくしてその草庵を訪れた田代陣基ちんきに語った内容を、陣基が筆記したものとされる。全部で一一の問書からなる。それぞれの問書には五〇から二〇〇程度の長短の説話が収められ、合計一三〇〇以上に及ぶ。内容は、武士の奉公人のあるべきありようから、歴代藩主や家臣の事跡など、多岐にわたる。

① 主君の武辺

武士の奉公人が立てるべき四つの誓願の第一に「武道において後れを取り申すまじき事」（序文）が挙げられているように、『葉隠』もまずは武辺を重視する。そもそも『葉隠』で理想の主君とされる佐賀鍋島藩祖直茂は、鍋島家が竜造寺の家臣であった創成期から今山夜討ち^②をはじめとする多くの存亡を賭けた戦で一軍の長を務め生き抜

いてきた歴戦の勇士である。龍造寺隆信の死後、佐賀鍋島藩を率い、秀吉に仕えるようになってからも、島津攻めや朝鮮出兵の際に一軍の大將として活躍している。その思想も、例えば、武士道は「死狂い」である（一の一三）といった極めて武張ったもので、死の覚悟をして狂ったように戦うもの一人を殺すことは、数十人が相手になってもできないものだ、という。自身の度重なる戦闘体験からの言葉であり、主君・直茂の武事の優秀性を端的に示している。

②主君の慈悲

他方、『葉隠』においてもやはり慈悲が重視されている。『葉隠』の慈悲は大きく主君のものと臣下のものとに分かれる。まずは主君の慈悲から押さえておこう。主君の慈悲の対象は、臣下から民百姓、さらには訴訟の際の敵対相手まで多岐にわたる。主に歴代主君の来歴が記された聞書三から六まででは、その主君の慈悲が具体的に発動する場面がいくつか語られている。例えば直茂は、ある寒夜に自らの寒さから牢屋の罪人の寒さに思い至り、粥を施したところ、罪人達は涙を流して有り難がったと伝えられる（三の三三）。そして、このような直茂の慈悲深いありようは、それ以降の主君にも理想として踏襲される。例えば、直茂の二代の藩主光茂について記された五の六四では、慈悲深く、家中下々のものまで痛むことがないようにお思いになられていた、と主君の慈悲について規定された上で、その具体例として、光茂に花火の話題をした堀田玄春を、火気厳禁の法令ため下々のものを罰せねばならなくなることからとたしなめたところ、それまで雇い分だった玄春が感激して、そのまま家臣になることを申し出た事例が挙げられている。

さて、主君が慈悲を実際に発動している場面を調べてみると、とりわけ家臣の罪を許すところが多いのが目に付く。なかでも注目されるのが、直茂が斎藤佐渡やその子用之助の、本来死罪とすべき罪を許すよう願う場面（三の一六）、あるいは、直茂の子で初代藩主の勝茂が

中野空之助の罪を罰せず忠告しただけで許してしまう場面（四の三三）である。これらの例に注目すると、許す相手は、とりわけ武勇と忠義に優れやがて主君の死に際して追腹するような家臣であることが分かる。そして、『三河物語』と同様、主君が慈悲から罪を許すことが、優れた家臣に命を捧げる覚悟を生じさせ、実際に追腹させるに至っているのである。

③主君の情け

また、『三河物語』で主従が主君の御情けによって深い心の交流を実現していたのと同様に、『葉隠』でも主君の些細な一言とそれを受けた『葉隠』の語り手・山本常朝との深い心情の交流が描かれている。そしてそれが、実際に常朝に追腹の覚悟をさせるに至っている。すなわち、江戸詰で火事の際の家臣の部署を決める際、係の者が常朝らを書物の避難係にと申し上げたところ、主君光茂が「常朝は」若い者ですから私の供を申しつけなさい」といって側近の役を命じた。そのとき常朝は腹を切る気持ちになったという。また、常朝が大坂で御夜着や御布団を拝領した際、光茂に「志までにやるぞ」と言われたとき、この布団を敷き御夜着をかぶって追腹したいと、骨の髄まで有難く思ったという（二の六三）。主君の些細な一言や、自分が使っている布団や夜着を与えることが、「忍ぶ恋」（二の二、三三）すなわち思いを打ち明けず死んで行く報われることをまったく求めない一方的な恋にも似た主君への思いを生じさせ、追腹¹²することを決意させるに至っているのである。

ここまで見たところで、いったん、『葉隠』における武辺に優れ戦に勝つことと慈悲や情けとの関係についてまとめておこう。すでに見た『三河物語』と同様に、『葉隠』においても、主君の慈悲や情けが主従の深い心情の交流を成立させ、相互の関係を強固にしていた。このことは、いざ戦という場面では、勝つことに資することになるだろう。よって、両者は矛盾するものではなく、慈悲や情けが戦に勝つた

めの有効な手段として位置づいていると理解することができる。

④ 奉公人の慈悲

次に、奉公人の慈悲について見て行こう。聞書一、二では、主に奉公人のあるべきありようが記されており、そこでもやはり慈悲が重視されている。この、奉公人の慈悲について詳しく記されているところに『三河物語』や『甲陽軍鑑』とは異なる『葉隠』の特徴がある。

『葉隠』によれば、武士の奉公人は四つの誓願を立てるべきとされる。第一に、武事において遅れを取らないこと（武辺）、第二に、主君に奉公すること（奉公）、第三に、親に孝行すること、そして、第四に挙げられるのが、「大慈悲を発し人の為になるべき事」である（序文）。第一に挙げられているのはやはり武辺だが、それと並び立つものの一つとして慈悲が挙げられているのである。

『葉隠』のいう慈悲とは、総じて言えば、何事も主君のため、父のため、諸人のため、子孫のためにすることである（二の一七八）。その内容は、諸人を我が子のように思うとき諸人もまた私を父のように思うので天下泰平のもとには慈悲である（家康の言葉）と説明される（同前）。ここから、『葉隠』の慈悲は、親子モデルで他の人々を我が子のように思い、何事も相手のためにすることと理解できる。また、四請願の慈悲の規定「人の為になるべき事」（序文）は、あらゆる人を御用に立つものにするのである（二の一九）と言い換えられる。それは具体的には、他の奉公人の受け入れ易いように意見をして悪い癖を直し、御家の御用に立つようにならなければならない（二の一四）。『葉隠』のいう慈悲は、もともと一切の生きとし生けるものを対象としていた仏教の慈悲とは異なり、主君、佐賀藩の藩士、佐賀藩の領民、そしてそれらの子孫という限定された対象を持っている。そして、仏教の慈悲のように生きとし生けるものを所有への執着を離れた本当の安楽すなわち仏の覚りに導くことを目的としているのではなく、それぞれを御家の役に立つようにするという限定された世俗的な目的を持つ

ているのである。

それにしても、御家の役に立つようになることは、さしあたり楽なことではなく苦しみを伴うように見える。慈悲の一般的な意味が苦を抜き楽を与えることであるとすると、人々を御家の役に立つ¹³⁾ようにすることが、どうして人々に楽を与える慈悲になるのだろうか。

一つには、御家といつても、それを体現しているのは具体的には主君であるので、慈悲と情けを与えてくれる主君の役に立つ充実感が得られる、ということであろう。また、人々をお役に立てようとしている対象である御家・佐賀鍋島藩は、ご先祖様方の御苦労・御慈悲によって成り立っているとされる（序文）。そこで、そのためになるようにすること、歴代の主君やそのために尽くした奉公人の先祖と同じ慈悲の働きに参与させようとしているということになる。この点を考え合わせるならば、御家の役に立つようには、歴代の主君と奉公人の先祖から今の主君と奉公人の子孫まで連綿とつながる御家の慈悲のはたらきに参与させることになる。このような、身近で手触りのある共同体においてその慈悲のはたらきに参与する充実感を与えることが、楽を与えることになる、ということであろう。

⑤ 武辺と慈悲との関係

次に、改めて『葉隠』を広く見渡しての、武辺と慈悲との関係を確認しておこう。まず、『葉隠』において、慈悲と仁とはほぼ同義で使われていることは確認しておく（二の一七八など）。ところで、一般に「知仁勇」の三徳とされるが、『葉隠』ではそれが「勇知仁」（二の一〇一）と言い換えられる。『三河物語』の徳川三引付と同様に、まずは武勇が第一に挙げられており、仁・慈はそれに次ぐ物とされているのである。他方、慈悲から出た武勇は本物であるともいわれる（二の一七八）。すなわち、慈悲は、本物の武勇を成り立たせるうえでなくてはならない前提とされているのである。ここで慈悲は、武勇を発

揮して勝つための単なる手段ではなく、それがなければ成り立たない前提としての位置を占めている。

さらにいえば、武勇と慈悲は、相互にそれぞれを補いあう関係にある。高伝寺¹⁴の第十一代住職であり、常朝が師事した湛然和尚は、次のようにいつていたという。すなわち、いつも、出家は慈悲を表にしてい内にはあくまで勇気を蓄えていなければ、仏道を成就することはできない。また、武士は勇気を表にして内心には腹が破れるほど大慈悲心を持たなければ家業は立たないものである(六六の二一)。すなわち、僧侶は慈悲だけではなく武勇を併せ持たねばならず、武士は、武勇だけではなく慈悲を併せ持たねばならない、という。

さらに、慈悲は運を育てる母のようなもので、武勇のみの武士は断絶するともいわれる(同前)。そしてその具体例として、武勇と慈悲とを兼ね備えていた直茂と、武勇のみで慈悲心に欠けていた龍造寺隆信が対比される。すなわち龍造寺と領地を接して敵対していた神代勝利^{くましろかつ}が、家の生き残りをかけて龍造寺との縁組みをするに当たり、武勇のみで慈悲に欠ける隆信より両方を兼ね備えた直茂の一門の方が将来繁栄すると予測し、直茂の子をいったん龍造寺の養子にしてもらい、それと縁組みしたという(六六の一九)。このように、『葉隠』においても、『三河物語』と同様に、慈悲は武勇と合わせてはならないもので、運を育て¹⁵、御家を存続繁栄させるために必須のものときられているのである。

⑥まとめ

以上、『葉隠』の武辺、慈悲、情けについて見てきた。最後に、はじめに立てておいた問いに戻り、それら意味と相互の関係を確認しておこう。『葉隠』においても、主君、家臣ともに、まずは武辺が第一とされる。その上で、慈悲や情けが合わせてはならぬものとして重視されている。主君の慈悲は、家臣や領民、さらにはときに敵対勢力の痛みを思い、相手を痛まないようにすることであり、具体的に

は、とりわけ罪を許すことであった。また、情けは、家臣に些細な言葉かけたり、主君が自ら用いていたものをあえて与えたりすることであった。これらは、家臣を感激させ、忍ぶ恋にも似た過剰な思いを生じさせ、ときに追腹を決意させるに至っていた。ここに、『三河物語』同様、主君の慈悲や情けが、家臣の主君への思いを引き出し、強固な主従関係が形成されているのを見て取ることができる¹⁶。また、『葉隠』に特徴的な奉公人の慈悲は、主君をはじめ同僚や領民など御家に関係する人々に細やかな配慮をして意見をしながら、御家の役に立つように育ててゆくことであった。

そして、これら主君と家臣の慈悲は、御家の家臣の武事や奉公における献身的なはたらきを引き出す。この意味で、それは、主君が勝ち続け御家が維持繁栄してゆくための手段として位置づけることもできる。他方、慈悲にとめた奉公人は、代々の主君や奉公人の先祖から脈々と伝わる御家の慈悲の働きへ参与することで充実感を得ていた。あるいは、主君の慈悲や情けを受け止めて、忍ぶ恋にも似た深い思いを起こしていた。これらの点からすれば、慈悲や情けは、『三河物語』と同様に、奉公人にとっては、それ自体に会うことが目的であるとも言えるような重要な位置を占めていることが理解される。

⑦外部の慈悲

ところで、慈悲自体に注目すると、それが、武士の主君や奉公人の外部にあつて、両者を制限しているのを見て取ることができる。すなわち、一つには、主君が運を得るために慈悲に努めなければならぬというとき、運を司っている何者かが、主君の外部にあつてそれ以上位から一定程度の影響力をもって行動を規定しているのである。あるいは、武士と僧侶とがそれぞれ勇気と慈悲を担い、相互に補完しあっているというとき、僧侶が信じる対象であり慈悲の出所でもあるところの仏教が、その外側にあつて、武士の武勇に慈悲を補いつつ、上位から一定の制限を加え、武が無方向の単なる暴力の発動に墮落するの

を押さえているということもできる。また、ご先祖様方のご苦勞、御慈悲によつて御家が成り立つており、その営みに主君や奉公人が参与していくというとき、そのはたらきを慈悲が規定し、その慈悲が仏教から出ているとするならば、武士がなす慈悲は、それが純粹な仏教のそれとは異なるにせよ、やはり武士の行為の規範となつて、武士の行為を外から律している。そして、このような解釈の裏付けとして、歴代主君が、僧侶や寺を大切にしていることが想起される。ここに我々は、仏教の慈悲がそれ自体で武士から独立して外部から働きかけて、武士の武勇が単なる暴力の発動に墮落することを制限し、それに一定の方向を与えているのを見て取ることができる。

三 『甲陽軍鑑』

最後に、『甲陽軍鑑』⁽¹⁾（一五七五〜八六年頃成立）について見てゆこう。『甲陽軍鑑』は、戦国大名武田信玄、勝頼を中心に、甲州武士達について描かれたもので、末書まで含めると全二三巻からなる。内容は、武田氏の分国法から、国を滅ぼす大将と比較した理想の大将論をはじめ、信玄が活躍しはじめてから勝頼の代に滅びるまでの合戦の記録などの多岐にわたる。「武士道」という用語の初出文献としても知られる。

① 武辺

『甲陽軍鑑』においても、これまで見てきた二書と同様に、武辺が第一であるとされる。例えば、巻五に記された優れた大将の四つの類型において、すべて「たびたび戦に勝」つことがはじめに挙げられている。あるいは、理想の大将とされる武田信玄が優れている理由を説明する際には、父信虎が八千の軍勢でも落とせなかつた信濃海野口の城を、初陣で若干一六才にしてわずか三〇〇程度の軍勢をもつて優れた軍略で攻め落としたこと（巻二品第六）、そして、以後、五三歳で亡くなるまで、生涯にわたつて、北条氏康、上杉謙信、織田信長、徳川家康といった名だたる大名を相手に、相手領内に攻め込み、奪い取

ることはあつても、一度も郡や城を攻め落とされるようなことがなかつたことが挙げられている（巻二品第八）。『甲陽軍鑑』においても、武士が優秀かどうかの基準が、まずは武勇に優れ、戦に勝つこととされているのである。

② 大将の慈悲

他方、『甲陽軍鑑』においても、やはり慈悲が重視されている。しかし、慈悲の用例を調べると、その内容は、いわば大将としての公正な慈悲とでもいふべきもので、これまで見てきた二書のそれとは大きく異なっている⁽²⁾。

『甲陽軍鑑』では、よく知られているように、国を滅ぼす四種類の大将の類型が挙げられている。その一つが「利根過ぎたる大将」（巻四）である。そして、このような大将の特徴の一つが無慈悲であるとされる。それとは対照的に、優れた大将は慈悲深いとされる。例えばこの部分から、慈悲の内容を読み取ることができる。

巻四によれば、利根過ぎる大将は、私利私欲が強く、無慈悲で、我が強くて人の意見を聞かず、下々の者たちの富を収奪したり、家臣の手柄を横取りしたりするという。それとは対照的に、優れた大将は、慈悲深く、適材適所で人を使い、家臣をはじめ様々な身分のものの意見を聞いたり、自分の采配で勝つても部下の手柄にしたりするという。

また、優れた大将は、行儀が良いので義理が深く、義理が深いので分別があり、分別があるので慈悲があり、慈悲が深くそれぞれに人を見知つて使うので、一人として怨み申し上げるものはない、ともいわれる（同前）。ここで、優れた大将には、分別があるので慈悲がある、というように、分別から慈悲が導き出されている点が注目される。分別とは、是非善悪や道理をわきまえ知ることであるが、『甲陽軍鑑』ではとりわけ、賞罰が明らかであることとされている。すなわち、利根過ぎる大将が家臣の手柄を横取りする、あるいは逆に、弱すぎる大将が、手柄のないものにまでもみやたらに賞を与える（巻五）のと

は対照的に、優れた大将は、家臣や下々の能力を見知って、それぞれに相応しい仕方を使い、はたらし相応の賞罰を与えることができることとされているのである。

では、このような分別から慈悲がどのようにして出てくるのだろうか。慈悲とは一般的に相手の苦を抜き樂を与えるという意味であった。優れた大将が分別をはたらかせ家臣の能力をよく見知って使うならば、家臣は仕事と相応の収入⁽¹⁹⁾、そしてそれに伴う充実感が与えられ、主君を恨むようなことはなくなるだろう。反対に、もし大将が、弱すぎる大将のように、家臣の能力を知らず、能力や努力のないもの高い地位や報酬としてそれに伴う仕事を与えてしまうならば、能力もあり努力もしているがそれに相応しい地位も報酬もないものは、充実感も得られず苦しむことになるだろう(巻五)。あるいは、利根すぎる大将がそうするように、町人を必要以上に取り立てたり、部下や百姓町人から必要以上に富を収奪したり、手柄を立てた家臣から手柄を奪ったりしてしまうなら、やはり能力があつて努力もしている武士は、本来の役割や収入や手柄、そしてそれに伴う地位が得られず、充実感も公平感もないなかで、苦しみを感じることだろう(巻四)。ここでは、能力に相応しい仕事、仕事相応の収入、そしてそれらから生じる充実感があるのが樂で、それらが無いのが苦である。したがって、分別をはたらかせ、それぞれに相応しい仕事と収入を与えることが樂を与える慈悲となる。『甲陽軍鑑』の慈悲は、家臣や百姓町人の能力と努力相応に仕事と収入を与えるという、分別に基づく慈悲なのである。これは、仏教の慈悲が、所有への執着を離れた絶対の安樂を与えようとしているのに比べると、世俗的、現実的な利益を与えようとしている点に特徴がある。この点で、『孟子』の王道論と似通っており、おそらくそれを踏まえてのものであるろうが、『甲陽軍鑑』の慈悲は武事にも応用される点で、覇道を否定する『孟子』の王道論とも大きく異なっている。また、『三河物語』の慈悲が、通常を越えた贈与によ

って、ときに家臣と心情の交流を生じさせ、過剰な思いを起こさせていたのと比べると、『甲陽軍鑑』の慈悲は、通常を越えない適正な役割と収入を与え、そのことによって家臣や民の適正さへの要望を満足させている点に特徴がある。言い換えれば、それは大将の立場から分別を働かせて皆が納得できる公平な配分ができる政治的な慈悲⁽²⁰⁾であるといえる。

④ 慈悲の効用

では、このような慈悲は、どのような結果をもたらすのだろうか。『甲陽軍鑑』は、優れた大将が慈悲の心から人を能力に応じて使うと、戦や刑罰で人を殺した罪を消すことになるという。すなわち、優れた大将は、敵と戦ったり、刑罰を実行したりする際、人を殺すことになるが、それを悪果をもたらす罪とすると、慈悲という善の功德が、それを消すとされている。ここでは仏教の因果応報説を踏まえ、慈悲という善の功德が、罪を消し、悪果を避けるためのものと位置づけられているのである。

また、無慈悲は御家に災難を、慈悲は繁栄をもたらすとも言われる。すなわち、信玄から山本勘助へ質問で、他国を占領したときに他国の侍を全員切り捨てるか追い払うかして譜代のものだけに領地を分割するやり方はどうかと問うたところ、勘助は、それは国持大将が持つべき慈悲の心が欠けたやり方であるので天道の憎しみの受け災難が起る事例を再三にわたって見聞きしたという⁽²¹⁾(巻一〇の一五)。あるいは巻二〇では、家康が、武田勝頼の死に際して、慈悲の心から、勝頼の菩提所に寺を建てたことから、武田の譜代衆が家康を大切に思うようになったという。それとは対照的に、勝頼の首を京都の獄門にさらした信長はやがてすぐに滅んだことが記されている。このように、『甲陽軍鑑』の世界では、慈悲は天道といった因果応報をつかさどる超越的なものと関わり、罪を除いて繁栄をもたらすものとされており、それとは対照的に、無慈悲は滅亡をもたらすと考えられているのである。

⑤ 武辺と慈悲との関係

このように見ると、『甲陽軍鑑』の慈悲は罪の報いを避け、運を強くするものと理解されており、『三河物語』や『葉隠』とほぼ同様に、一面において、敵対勢力に勝って御家を繁栄させるための有効な手段と位置づけることができる。他方、慈悲は、それ自体が超越的なものに裏打ちされており、目的としての側面を併せ持っている。すなわち、巻一二では、信玄が都に上洛を目指す際に次のように語ったとされる。すなわち、信玄が天下を取る目的は、仏法、王法、神道を中心にして諸侍の作法を定め、政治を正しく行うことである、と。信玄が戦って勝ち続けた先に見据えていた目的は、仏法などの超越的な価値に基づいた作法を定め、政治を正しく行うことであつたといふのである。ここで、仏法（慈悲）、王法、神道といった超越的な価値は、『葉隠』と同様に、武士の外部にあつてそれを根拠づける位置を占めている。そして、このような超越的な価値を信じ、それを実現することが、優れた大将の代表者武田信玄の目的であるとされているのである。

このように、『甲陽軍鑑』の慈悲は、勝って御家を繁栄存続させるための手段であり、かつ目的であるという点で、これまで見てきた『三河物語』や『葉隠』と相通じるものである。しかし、その目的が、主従の深い心情の交流を与えたり、あるいは、主君、先祖から脈々と伝わる慈悲の働きに参与させて充実感を与えたりするといった、身近な人間関係に関わるものというのではなく、もっと距離のあるところから大将として適正に分別をはたかせ、家臣や百姓町人にそれぞれに相応しい役割と収入を与え、その点において楽を与えるという、大将の政治的な慈悲であるということにその特徴がある。

⑥ 仏法の慈悲と武辺

また、『甲陽軍鑑』には、これまで見てきたような大将の慈悲とは別に、仏法とその理念である慈悲が、『葉隠』と同様、武士の外部にあつて、一定の影響力を持って武士の行動を制限しているのを見て取

ることができる。例えば、武田信玄は、様々な理由から出家して仏法を熱心に学び、ひろく諸宗派の守護者となつて仏法の実現に協力しているが、そうするよう仕向けたのは、信玄が評価する有力な僧侶であつた（巻一品第四）。このとき、信玄はもはや単に武事一辺倒に生きてあくなき所領の維持拡大に明け暮れているのではない。そこでは、勝ちさえすればよいという価値観は相対化され、そのやり方や目的に、大きな制限が加えられているのである。

他方、『甲陽軍鑑』における武辺と仏法の慈悲との関係を問題とするとときに注目されるのは、戦国の世においては仏法の慈悲を実現するために、武事が必要不可欠の前提となつているといふことである。すなわち、信玄が坐禅に入れ込み、『碧巖録』を巻七まで参禅し、さらに巻一〇まで参拝して大事を修得しようとしたときに、僧侶に大事の修得まではしないほうがよいと止められたことがあつた。理由は、武事が疎かになるからである。それよりは、武士の大将として世俗の世界で勢力を拡大し、仏法を広く保護することが、仏法を広めて慈悲を手助けすることになるといふ。そして、その助言を受け入れた信玄は、以後、死ぬまで広く仏法の保護者となつたといふ（同前）。ちなみに、信玄の死後、信玄が領内に保護していた寺院は安全保障上の武力的な基盤を失い、やがて信長に焼き滅ぼされてしまう。『甲陽軍鑑』の描く戦国の武士の世界においては、仏法、そしてそのはたらきである慈悲を継続的に実現するための不可欠の基盤として優れた武士の武力が位置づけられ、その維持繁栄が称揚されているのである。

⑦ 『甲陽軍鑑』の情け

なお、残された問題として『甲陽軍鑑』の情けがあるが、この点については、管見の限り、『甲陽軍鑑』のなかにはつきりと対応する内容を見出すことはできなかった。ただし、いくつか内容上比較的近い事例を見出すことができる。すなわち、巻一品第二に列挙された道德的訓戒の一つ（第五七条）では、大将は送られた食料などを目の前に

いる将兵に分けるべきであるとされる。具体的には、将が濁り酒を送られたときに、一人で飲むのではなく川に流れて将兵と酒を分け合った事例が、見習うべきものとして挙げられている。主君と家臣とが一緒に酒を飲んでいるという点で、『三河物語』の御情けの事例に近いものであるが、『甲陽軍鑑』の方は、道理に基づく公平な配分が求められているようにも解釈できるので、主君の通常を越えた些細な言葉や行為であることをその内容の核心とする御情けと同じであるかどうか、にわかには判定できない。また、巻一〇において、軍中の一二使について列記されているところで、小幡惣七郎が上杉謙信方のすぐれた武士を馬から組み討ちにした後、自分も深手を負ってそのまま死んだ際、信玄が死体を取り置いた寺に焼香にいったのに対して、人々が過分浅からぬことと感動したとの記述がある。これなどは、主君の通常を越えた「過分」な贈与と理解されており、情けという言葉は使用されていないが、内容上相通じるものであるといえよう。

まとめ

以上、本稿では『三河物語』、『葉隠』、『甲陽軍鑑』という武士道を代表する三つのテキストの武辺、慈悲、情けについて、それぞれの意味と相互の関係を確認してきた。最後に、それぞれのテキストを比較しながらまとめておこう。

『三河物語』においては、徳川家の維持繁栄を可能にしたものとして、主君に徳川三引付が求められた。第一に武事の優秀性、第二に御慈悲、第三に御情けである。主君は、武勇において家臣より優れていることを第一の前提としつつも、それに加えて、御慈悲、すなわち家臣や領民の生活のために尽くしたり罪を許したりすること、あるいは、敵対者すら何回かまでは許したりすることを重視した。加えて、御情け、すなわち情けのこもった些細な言葉や行為が求められた。御慈悲や御

情けは、主君の側からの通常を超えた贈与であり、それを受けた家臣は感激し、戦において自分や妻子の命を顧みずに戦うという通常を超えた行為で応えようとする。そして、そのような家臣の思いや行いを受けた主君は、そのような譜代の家臣を過分のものと受け止める。このように両者が連鎖的に相手に対する過剰な贈与を積み上げてゆくことで、主従関係は絶対的といつていいほどに強まり、それが戦をはじめ、御家を強固にすることを可能にしていたという。

『葉隠』においても、主君は武勇において優れていることはもちろん、慈悲や情けをもっていることが求められていた。『葉隠』における主君の慈悲は、相手の痛みを知りそれを除こうとすることであり、その対象は、家臣のみならず牢屋の罪人や領民、さらにはときに敵対勢力にまで及ぶが、それはとりわけ、武勇と忠義に優れた家臣の罪を許す、というかたちで発揮された。それを受けた家臣も、主君が死ぬと同時に追腹するなど、並外れた忠義で応えた。また、主君の情けも『三河物語』と同様、家臣に対する些細な言葉や行為というかたちで発動し、それを受けた家臣は、忍ぶ恋のような主君への過剰な思いを抱き、追腹を覚悟していた。『葉隠』においても、いささか観念化、純化しているが『三河物語』とほぼ同様の慈悲や情けが発揮されているのを見て取ることができる。

また、『葉隠』に特徴的なのは、奉公人の慈悲についても詳しく説かれていたことである。奉公人は、武事に励むのみならず、平時において奉公に尽くし、さらに、慈悲に努めることが求められた。奉公人の慈悲は、何事も自分よりは人のためにすることであり、具体的には、他の人々を御家のお役に立つようにすること、より具体的には、他の人々の悪い癖を、上手に意見をして直すことであった。『葉隠』において、奉公人の慈悲は、主君のそれが基本的に上から下という方向性を持つとは異なり、主君に対し、あるいは同輩や下のものに対して、お家のため、という立場から、それぞれに発揮されるものであった。

それは、上から下では必ずしもないどころか、場合によっては下から上への方向性を持つため、意見をするとときに過剰なまでの配慮が求められるのも特徴的である。

『甲陽軍鑑』においても、優れた大将の持つべきものとして慈悲が尊ばれていた。それは、是非善悪の道理を正確に知る分別から出るもので、家臣や百姓町人を適材適所で使い、一つの手柄には一つの報酬というように、家臣の仕事の価値を正確に測り、それに応じた仕事や報酬を与えることであった。このような慈悲は、いわば「通常を超えない公正無私な配分」とでもいうべきもので、『三河物語』や『葉隠』の慈悲が「通常を超えた贈与」であったのとは大きく異なる特徴的なものである。他方、慈悲の言葉は使われていないものの、『三河物語』や『葉隠』の慈悲に通じる内容も語られていたことも押さえておく。

また、『三河物語』、『葉隠』、『甲陽軍鑑』に共通して注目されるのは、武士道において、慈悲という武士の生きる世俗世界の外部にある超越的なものが、勝つことを求める武士の生き方において、ときにそれを、悪果を和らげ、運を強くし、敵を味方にするといったかたちで裏打ちしていたということである。さらに『葉隠』や『甲陽軍鑑』にあつては、仏法の慈悲は、ときに武士道の外部にあつて、武士が武力を発揮して所領の維持拡大を目指すにあたり、とすればそれが名利を求めらるあくなき暴力となるのを相対化、制御していた。ここに我々は、武士道において、慈悲が勝つことを裏打ちしつつ、ときに緊張感をもってそれと対峙し、その暴力を相対化、制御していたのを見て取ることができる。

〔注〕

(1) 佐藤正英「武士の思想―主従関係をめぐって」(『季刊日本思想史』第四号、平成九年)、菅野覚明「よみがえる武士道」(P H P 研究書、平成一五年)など。

(2) 菅野覚明前掲書第一章。

(3) 代表的なものに、津田左右吉「文学に現れたる我が国民思想の研究―貴族文学の時代―」(『津田左右吉全集』別巻第二所収、昭和四一年(初出は「国民思想の研究」(大正五年))、および家永三郎「和辻博士」(日本倫理思想史一論)(『史学雑誌』昭和二十七年四月号所収)など)。

(4) 菅野覚明前掲書第一章。

(5) 「平家物語」(『実盛最後』)。

(6) 日本倫理思想史における武士道の研究は、和辻哲郎「日本倫理思想史」をもって嚆矢とする。和辻はそこで武士の道徳を「献身の道徳」(同書第三編第二章「板東武者の習い」)と規定しているが、そこでの和辻の考察では、武士道を扱っているながら、倫理思想に焦点をしばっているため、武事についての言及がほとんどなされていない。第五篇第二章にいたり、『甲陽軍鑑』の解釈のところで、一部、武士の本質が武力であることについても触れられてはいるが、つまるところ道徳的な心構えが優位であるとされている。本稿からは始める一連の武士道についての考察では、大きく言えば、和辻説の相対化と乗り越えをはかるべく、武士道の代表的なテクニストについて、はじめから武事が優先されていることを押さえ、それとの関連に注目しながら慈悲や情けについて解釈し、両者を踏まえた総合的な武士道を明らかにすることを試みるものである。

(7) 本稿での『三河物語』からの引用、参照は、『三河物語・葉隠』(日本思想大系二六、岩波書店、昭和四九年)による。

(8) 「徳川三引付」については、佐藤前掲論文に優れた考察がなされており、今日でもほぼ定説となっている。本稿の理解もそれによるところが多い。ただし、佐藤は御慈悲と御情けについて、前者は家臣のみならず民百姓も対象で生命の維持あるいは経済的な保証がその核心であるとし、後者は家臣のみが対象で些細な言葉などによる心情の交流を核心とするというように、御慈悲と御情けの対象と内容をかなりはっきりと分けて理解しているが、この区分には取まり切れない例外的な用例もままある。また、佐藤の論では、『三河物語』には大きく取り上げられている家康の敵対勢力に対する御慈悲が取りこぼされてしまっている。『三河物語』の御慈悲と御情けは、これらの点も踏まえた再定義が必要である。本稿ではさしあたり、御慈悲の対象は敵対勢力にも及ぶという点を付け加えておく。

(9) 菅野前掲書第四章。

(10) 本稿での『葉隠』からの引用、参照は、『定本 葉隠(全訳注)』(佐藤正英校訂、吉田真樹監訳注、上・中・下巻、ちくま学芸文庫、平成二九年)による。なお、『葉隠』は全部で一一の開書からなり各開書は長短の説話に

分かれているが、本稿で参照する際には、上段に開書、下段に説話の番号を記し、(一の二)などと略記する。

(11) 元亀元年(一五七〇)に佐賀城が大夫友氏の一〇万あまりとも言われる軍勢に囲まれて危機に陥った際、夜襲を進行してわずか一七騎で佐賀城を出発した直茂は、途中はせ參じた兵と合わせて八〇〇余騎で敵の本陣を夜襲し、大将の親秀を討ち取って敵を総崩れにさせたという(『直茂公譜』第一)。

(12) 追腹の覚悟から主君の慈悲や情けの目的を逆算すると、主君が、自分や御家が勝って存続繁栄するために献身的に奉公し、いざ戦いというときには、自分のために死ぬような家臣を計算して育てているようにもみえる。この場合、主君は家臣を勝つための単なる手段、道具として試みてしまっているのではないだろうか。

しかし、感情とは一般的にある程度伝播するものであるので、利害損得に基づくまったくの計算によるものではなく、実力のある家臣たちがそれを感動して受け止めるとは考えにくい。主君は、単なる利害からではなく、心から情けを込めて言葉をかけていたと理解するほうが妥当であろう。また、たとえ効果を計算しているとしても、それは肯定的に捉え直すこと、家臣の生に充実した目的を与えようとしているとみることができ、一方、家臣の側からみても、このとき家臣は単なる手段に墮落していると、簡単には言い切れない。これらの家臣のなかには、追腹する際には、次の主君から止められているにもかかわらず、それでも断行した家臣(斎藤佐渡、三の五二)もいる。このような家臣は、明らかに自ら主君と一緒に死を選んでいく。そして、ここで実現しているのは、かつて願っていた通りに御家や主君に尽くし切った充実した生である。死を自ら選ぶような家臣本人にとっては、主君との深い心情の深い交流の果てに、御家や主君に尽くして死ぬことが理想とされていたのであり、この場合、主君の慈悲や情けの目的は、単なる利害のためではなく、これを成就させることであつたといえよう。

とはいえ、ここでさらに問題になるのが、自らの意思に反して追腹せざるを得なかった家臣がいた可能性である。追腹が称賛されるようになれば、それが義務化して、本人の意思にかかわらず実質上強制となってしまうこともありえることは、見やすい道理である。もしそうであるとすれば、追腹は自己実現ではなく、かなりひどい暴力の結果となる。この可能性については、とりわけ太平の世の追腹の場合、どうしても残るといわねばならない。

なお、佐賀鍋島藩における主君の慈悲は、やがて家臣の追腹を禁止するに至る。この点について、詳しくは拙論『定本 葉隠「全訳注」』中巻解説参照。

(13) 『葉隠』で役に立つことが目指されている対象は、御家の他に主君がある

が、この点については情けのところで後述する。

(14) 鍋島家菩提寺。佐賀市本庄町本庄。六の二、一五六参照。

(15) ちなみに、『葉隠』に登場する理想の主君である直茂は、徹底した合理主義者で安易に迷信に騙されない知性を持ちながら(三の三二)、先祖の靈魂や神仏といった超越的な存在を篤く信じていた(三の一〇、一一、二四、二八、四〇、五六)。そして、このような姿勢はその後の藩主にも引き継がれる。この点についての考察は今後の課題とする。

(16) なお、『葉隠』における主君の慈悲は、『三河物語』と同様、敵対勢力に及ぶこともある。光茂は、隣藩の福岡藩と境界の背振山弁濟岳をめぐる訴訟沙汰があつた際、訴訟相手にまで慈悲をはたらかせている。五の七二、七三参照。

(17) 本稿での『甲陽軍鑑』からの引用、参照は、酒井憲二編『甲陽軍鑑大成』(本文篇上下、汲古書院、平成六年)による。

(18) ただし、『甲陽軍鑑』において、慈悲という言葉は使われていないものが見いだすことができる。例えば、卷一三の三〇には国法に背いたものの人によつては二度まで許す法令が載せられている。これは、家臣の死罪になるべき罪を許すという『三河物語』の御慈悲と内容上ほぼ重なるといえる。あるいは、卷一七の五では、武事において突出した働きを見せた曲淵という武士の公事での横柄なふるまいを、信玄が許す事例が挙げられている。これは、許された本人よりもむしろその裁きを見聞きした他の者達が感涙を流しているという点で、『三河物語』の慈悲とは異なるものの、主君が武勇に優れた家臣の罪を許し、通常を越えた贈与によつて家臣を感動させているという点で、内容上相通しているとみることができ、

(19) 『甲陽軍鑑』の軍法論(「卷九の二五」)では、山本勘助の言葉として、すぐれた軍法は国持大将の慈悲から出るものであるとされる。では、どうしてそういえるかという点、要は、すぐれた軍法があれば勝つて国が治まり人々に御恩(「収入」)が与えられ皆が安心するからであるという。武士の慈悲は利害損得に同定されるものではないが、他方、利害損得とまったく関係がないものではないことは確認しておく。

(20) 『甲陽軍鑑』が「武士の理想」として人を「統率するもの理想」「政治の理想」を説いており、その原理の一つとして慈悲があることは、和辻哲郎が『日本倫理思想史』第五篇第二章にすでに指摘している。『甲陽軍鑑』の理想の武士を政治的な公平性を重視したものと捉える点で、本稿に先行するものであるといえよう。ただし、和辻はここでも、武事についてはあまりこだわっていないかたとする。この点、まずは武事を第一とし、公正な配分と

いっても、単なる政治的な配分ではなく、とりわけ戦の場での働きを適切に評価し賞罰を与えていたと理解する本稿とは異なる。

(21) ちなみに、この事例の場合、慈悲の対象はもと敵対勢力の臣下となる。ここに、『甲陽軍鑑』においても『三河物語』や『葉隠』と同様、慈悲の対象は臣下や民百姓のみならず、ときに敵対勢力にまで及んでいるのを見て取ることができる。さらに、『甲陽軍鑑』では、武田信玄が戦で敵対し、武辺に

おいて際立った働きをした敵の侍大将を称揚し、罰するどころか好条件で積極的に取り立てて戦力化する事例がいくつか挙げられている(巻一二の一五、岡部次郎右衛門の事例など)。ここに、敵対勢力への慈悲が、戦力の増加という具体的な御家の繁栄と繋がられている事例を見いだすことができる。

